

三翠化学会

(題字は稲川先生)
第70号
令和3年11月30日 発行
三翠化学会
津市栗真町屋町1577
三重大学大学院生物資源学研究所内
電話 / (059) 232-1211
振替 / 00890-1-59345
印刷 / 株式会社 あるむ
TEL (052) 332-0861 大8 長谷川 正一

三重にも緊急事態宣言発令

三翠化学会・総会・懇親会 再延期

大都会だけではなく、三重県を含め多くの都道府県で緊急事態宣言が発令されました。コロナ感染第五波の蔓延にあつて、日本国中、大変窮屈な日常を送らざるを得ない状況が続いています。会員の皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。常日頃は、三翠化学会の活動に何かとご支援、ご協力を賜りまして心より御礼申し上げます。さて、すでに二年近くにもなるコロナ禍の現状は、三翠化学会の活動にも大きな支障を投げかけています。三重県下も緊急事態宣言下であり、三重大学内でも学生の感染クラスターが何回か発生し、日頃の教育体制等に大学当局は非常に緊張感を強いられています。そのような状況下で学内の先生方を集めての役員会は到底開催できず、大学施設の提供も一切していただけない状態です。目下二年近く役員会は開催できていません。今年もまた昨年同様、同窓会の総会・懇親会は延期せざるを得ない状況に追い込まれました。そのような中、昨年は会報「三翠化学」第六九号を発行し、今年もひきつづき第七〇号を発行することに

恩師近況 忍者と共に

久松 眞 (修8)

二〇一三年三月で定年し四月から伊賀地域との連携を主な任務とする三重大学伊賀研究拠点の副所長で四年勤めました。その後は、年々仕事は少なくなつて今は会議や里山整備で月に数回伊賀に行く程度です。時間ができましたので少しばかりの土地で野菜作りを楽しんでいます。三重大学の忍者研究に定年後の仕事としてかわりましたので紹介します。副所長の従来の任務に加えて理系の忍者研究が就任条件でした。仕事の局面が変われば当初は強いストレスを受けますが、新しい環境に

恩師近況 田舎で生きています

小畑 仁 (大15)

皆さんお元気ですか。新型コロナで外出もままならない毎日ですが、各方面で活躍のことと思います。直接お会いできませんので、紙面をお借りして近況を報告します。悠々自適、晴耕雨読、一言で言えばこんなところで。夏場は夏野菜づくりを楽しんでいます。ほぼ無農薬のため失敗することも多く、去年は病気にやられスイカ収穫ゼロでしたが、一昨年は七〇個以上も採れました。秋冬にはチンゲンサイや白菜を育てています。大学にいたころから、授業で話していることの実践を兼ねて先祖伝来のわずかな水田を耕してきましたが、このところ一袋三〇kgの玄米がとて重いと感じるようになり、今年から稲作をやめました。稲作は水の供給を通じての共同作業的なところが、水の順番が来ると代掻き、田植えなど必ず作業しなければならぬため、体調不良などきつてもきつて、やめ時でもありません。それと獣害が年々ひどくなり、その対策のほうに耕作より時間をかかると有様で、それも稲作をやめた理由の一つです。鹿、猪、猿、アナグマ、カラス、ヒヨドリ、いそうなものは何でもいて、植えたばかりの苗を踏み荒らしたり収穫間際の野菜を食い荒らしたりしていきます。それに息子たちのコンビニを少し手伝っており、従業員さんたちに採れたての野菜を配って、喜んでもらっているの勝手に誇っています。とにかく暇を持て余すことがないのは幸いです。体力の衰えは如何ともしがたく、もう少し、平均余命程度までは生きていたい、などと考えるのですが、こればかりはわかりません。自治会長など幾つかの地域の役割もあらかた卒業しました。そうこうしながら人並みの趣味も楽しんでます。土を耕すことも趣味ですが、世界遺産を見に行ったり、かつて学会や研究会で行つて心に残つたところなど家内と二人で見つたりして楽しんでいました。はやくコロナが収まって出かけたものと願つてます。出かけられない昨今は、食は不思議と生薬が多用されています。健康な人でも不意に想定外の強い恐怖などに襲われると正気を失うことがあります。忍者食に含まれる生薬の薬効をストレス反応の対策として今の科学的知見から推察すると、冷静に忍びの任務を遂行する忍者の知恵が垣間見られます。室町から戦国にかけて茶道や醸造など多く

●令和二年度 卒業生就職先●

NECソリューションイノベータ株式会社	三重県視覚障害者支援センター
アイピーシステム株式会社	寿がきや食品株式会社
エヌエスディ株式会社	太陽化学株式会社
キューピー株式会社	天野エンザイム株式会社
トヨタ紡織株式会社	富士ゼロックス三重株式会社
一般財団法人食品分析開発センター SUNATEC	敷島製パン株式会社
一般財団法人日本食品分析センター	名城食品株式会社
栄新薬株式会社	有限会社二軒茶屋餅角屋本店
株式会社 ADEKA	和歌山県庁
株式会社 Mizkan J plus Holdings	カイゲンファーマ株式会社
株式会社キナン	藤森工業株式会社
株式会社ファイブ	浜理薬品工業株式会社
株式会社メニコンネット	株式会社日東分析センター
株式会社高津製作所	丸善製薬株式会社
荒川化学工業株式会社	

(順不同)

社会人一年生

前川真璃 (大69)

大学を卒業してから早いもので、もう半年近くになりました。初めて親元から一人暮らしを始めたのですが、料理や洗濯などの家事に追われる生活にも思ひ慣れたように思います。さて、私は株式会社 ADEKA に入社しました。最初の約三カ月は事業部ごとに研修を行い、各部署の業務内容や製品について学びました。ADEKAは化学製品と食品の素材メーカーなのですが、思っていたよりも身近な商品にたくさん使用されています。ADEKAの製品が使用されている商品をお店で見かけるとつい手に取ってしまいます。現在は生産管理部スマー



ト工場推進グループに所属し、その名の通り工場の自動化に関する仕事を行っています。主な業務は工場へ導入する機械メーカー、AIシステムの選定や工場との情報交換などです。大学時代とは分野が全く異なる為、聞きなれない言葉が多々あります。今はコロナの関係でテレワークが多い為、会社の人にもなかなか会えず、話したことがない同期がいることが少し寂しいです。この状況がいつまで続くのか、気兼ねなく人と会える日が待ち遠しいですね。



四〇年ぶりに三重大学を訪ねて

山口政行 (大22)

昨年、古希を迎えた。

私は二期生で専攻は松嶋欽一先生と嶋田協先生の醸酵室でした。ヨット部で四年間、栗真町屋町海岸をわが家の庭のように接していた。

通勤マンション管理人をしており一〇年目に入った。趣味として花を育てて写真撮りエッセイを綴っている。大学時代を懐かしく思い二つのエッセイを綴った。

ひとつはヨット部の思い出。四階の教室で授業を受けながら窓の外に目をやると、青空を背景に海は白波がたち、砂浜には松の緑、まるで一幅の絵画を見ているようだった。

山に囲まれて育った私は、海に憧れてヨット部に入り練習に明け暮れた。紺碧の青い空と光り輝く青い海が目の前に浮かんでくる。ヨット部で春夏秋冬、海とともに過ごした四年間。海上での練習の日々、冬には砂浜を走り、防波堤で身を乗り出している腹筋鍛錬。……五〇年前の青春時代を懐かしく思い出す。

もう一つは一般教養の授業に見かけた教育学部生への淡い恋心を綴った。

一般教養授業で見かけた教育学部生に一目惚れ。清楚で知性あふれる表情に恋をした。キャンパス内で見かける度に想いは募り、クラブ活動部室に向う彼女の後ろから、「農芸化学コースの山口です。一度会ってもらえませんか」と声をかけた。驚いた表情の彼女から明確な答えはなかったが、嫌がる表情はなかった。その後、知り得た住所へ「キャンパスの〇〇で待っています」の手紙を綴った。

当日、いくら待っても彼女の姿はなく、無情に降る白い雪。YouTubeでアダムスの「雪が降る。貴女は来ない……」の情感あふれる歌を聴きながら淡い恋心を抱いた青春時代を愛おしく思い出す。年を重ねると思えば後悔といえども胸の中に眩しく輝く。君は今も元気だろうか。

何回かの校正を加えていくうちに大学四年間の思い出が走馬灯のように思い出され、無性に大学への思いが募った。練習に明け暮れた津海岸、恋心をいだいた彼女と出会ったキャンパスなどをもう一度見たいなつた。思いは風船のように徐々に膨らみ、この機会に津市へ出かけてみようと思った。

早朝六時に自宅を出て、近鉄名古屋線の津駅に着いたのは九時過ぎだった。バスターミナルの列に並び、周りを見渡すとその約五〇年前に驚いた。高層ホテルが建ち、多くのビルが立ち並んでいた。五〇年前のあの殺風景な駅周辺の光景がこんなに変化しているのを見ると五〇年間の歴史を感じた。

五〇年前、入学式に出席してくれた父との思い出。大学は地方の県庁所在地にあった。下宿先が決まり、寝具や家財道具を準備する

ために父も同行しその地を訪れた。街中に出かけて、布団、勉強机等を購入し、大学の敷地内を父とくまなく歩いた。その夜は、父と

ともに下宿先となる四畳半の部屋に雑魚寝をし、朝を迎えた。父が帰る時、津駅まで見送った。県庁所在地にしては鄙びた駅で階段も木製だった。父は別れを惜しむかのよう階段をゆっくりと上つていき、私が視界から消えようとする際、目と目の挨拶で「じゃあな、頑張れよ」と伝えていくように階段をゆっくりと上つていき、私が視界から消えようとする



津駅 東口



思い出のアスファルトの道



生物資源学部棟屋上より海をのぞむ

いま(二〇二一年六月)中旬、私はこの原稿を、中国江蘇省無錫市にて書いています。日本では、直後に控えるコロナ禍での東京オリンピック、遅々として進まないワクチン接種が気掛かりであった時期でしょうか？ 私は、二〇一八年春より、二回目となる中国での駐在生活を始め、これまでに通算で約七年ほど中国で生活をしていきます。

皆さんご存じの通り、コロナウイルスのパンデミックは二〇二〇年一月、中国から始まりました。私は中国国内で封鎖措置が始まる直前に、旧正月休暇で帰国していた為、当時の中国の厳しい封鎖状況を実際に体験することはありませんでした。しかし中国に滞在していた友人達と連絡を取り合い、気軽に外に出られない不安な気持ちを共有していました。

現在の中国では、海外からの渡航者によるコロナウイルス感染が、各地でぐわすかに散見されています。ですが、コロナ禍以前のような生活を送っています。外出の際には、バスや地下鉄などの公共交通機関を使う場合を除き、マスクを着けている人はほとんど見かけません。また、多くの人が密集する、人気レストランやライブハウス等でも、マスクをしている人はほとんど見かけません。政府機関は自国開発のワクチン接種を推奨し、管掌地域の企業従業員への接種を、やりわりと強要し始めているような状況です。



津駅 父とともに

生物資源学部総務部で自己紹介をし、屋上から海の写真を撮りたいたのでその許可を求めた。担当官に案内をされて屋上に上った。



思い出の海岸

今、私は

いま、中国・無錫に滞在して、

杉浦和彦 (大42)

種前にいち早く抑制しました。これは、中国が、一般市民への自宅隔離、海外からの渡航者へのホテル等での隔離を強要している結果です。中国という共産党一党国家のなせる業だ、と今でも強く感じています。

私も昨秋に中国に渡航しましたが、その前に二週間の隔離生活を体験しました。体験された方々の想いは様々だと思いますが、私は、隔離された部屋が割と広く、提供された食事に特に不満を感じなかった為、「お酒を飲みたい」という衝動に駆られることも、強いストレスを感じることもなく過ごすことができました。しかし、「再び隔離生活ができますか？」と問われましたら、間違いなくお断りしたいです。今では隔離期間が最長で四週間になっているようです。

現在の中国では、海外からの渡航者によるコロナウイルス感染が、各地でぐわすかに散見されています。ですが、コロナ禍以前のような生活を送っています。外出の際には、バスや地下鉄などの公共交通機関を使う場合を除き、マスクを着けている人はほとんど見かけません。また、多くの人が密集する、人気レストランやライブハウス等でも、マスクをしている人はほとんど見かけません。政府機関は自国開発のワクチン接種を推奨し、管掌地域の企業従業員への接種を、やりわりと強要し始めているような状況です。



今回の三重大学訪問では五〇年間の歴史を思い、過ぎ去った青春を懐かしく思うばかりではなく、未来に向けて発進する力をいだいたように思う。

キャンパス内を歩くと空気が多かつた頃とは異なり、街路樹は大きくなり建物も多くなり空スペースも少なくなつた。彼女に初めて声をかけた場所、アスファルトの小道は変わりなく存在していた。



ランニング大会の様子

大学時代の野球の思い出

吉田吉明 (大18)

「私にとつての野球 人生のページを語る」と題し、平成三十一年三月に開催された第一回関東支部総会で講演した。三翠化学会 杉崎会長からの要望もあり、かれこれ半世紀前になるが、大学時代に印象に残っている野球の思い出の一端を紹介したい。

全日本大学野球選手権大会に二回出場したわりにはというが、甲子園もそうであるが、神宮球場で試合ができる野球人自身が限られているし、まして両方出場できる人は更に限られるのに、大学時代の野球の思い出のインパクトが意外と小さい。というのは、中学時代はエースで石川県大会に出場し、スクイズにより〇―一で敗れ準優勝。金沢泉丘高校では、一年生からベンチ入りし投手兼外野手で、春季県大会、北信越大会で優勝、夏の大会は北陸代表決勝戦で惜敗。二年生で北信越の県大会で金沢高校との決勝戦で完封勝利、夏は県代表で全国大会へ、セクター一番バッターで出場。三年生の時はエースで、ほとんど決勝戦まで進出するも、ライバルである金沢高校に阻まれ一度も優勝できなかった一連の経験から、練習と勝負の厳しさが体に染みついていてからである。そういうこともあり、もともと大学では野球をやるとは全くなかった。

大学の合格発表もなく、当時の野球部長の岩本教授(当時は農芸化学科長)と松浦信(総第15回)主将から手紙が届き、野球部の入部を懇願された。入学願書の

履歴欄で野球歴を知ったと思われるが、親父からそこまで言われるのであればと説得され、バットとグラブを持参して津に向かった。三翠寮で多くの先輩野球部員を迎えられ、断る雰囲気もなく、早速、昔の教育学部附属中学校(当時は校舎はまだ残っていた)のグラウンドであったが、練習にやり出された。ただ、高校時代に野球を経験した先輩が少くないのに驚いたが、伊藤監督の指導によりチーム力は結構高いとは感じた。

入学してまもなく春の全日本大学野球選手権大会(以下、全国大会)の東海地区予選が始まり、三番バッターを任せられた。地区優勝し中部地区大会に進出したが、奇しくも、開催場所が故郷石川県の馴染みの兼六園球場で、筆者のさよならヒットで静岡大学との決勝を制して、念願であった全国大会の初出場を果たし、最高打撃選手賞(中日新聞)も受賞した。一年前から中京六大学が中部地区から独立し単独枠になったことが幸いしたが、故郷に錦を飾り、巡り合わせというしかない筋書きとなった。因みに、伝統の優勝旗は中部地区に残ったため、ペナントリボンの中京大学などの有名校と並んで優勝旗に結ばれている。

第一回全国大会は昭和四一年六月一五―一九日に開催されたが、一回戦は上田二郎(元阪神)を擁する東海大学と対戦し、〇―一でコールド負け。ただ残念なのは、初回に先頭打者酒井(化大16回)さんが二塁

打、バントで一死三塁の好機に初球のシュートのボールを打たされたことである。後の二打席は上田からは敬遠気味の四球だったため、打撃練習を見て初めから勝負するつもりは無かった。外野フライは打てるだろうと安易に打ち急ぎ、悔いが残る打席となった。

出場にあたり、先輩や各方面に寄付をお願いし、嶋林先生が奔走したように記憶しており、試合当日は、先輩の皆さんが神宮に応援に来て頂いたが、惨敗の姿を見せることとなった。翌年は、福井工業大学が中部地区に加盟してきた。一年生中心ではあったが、甲子園組が多く左腕の速球投手を擁する纏まったチームであり、接戦で敗れた。次の年昭和四三年の第一回全国大会には、三二二の接戦で福井工大を破つての二回目の出場となった。

第一七回全国大会は、昭和四三年六月二一―二六日に開催された。大学のユニフォームは、これまでの白地のユニフォームに胸の文字がえんじ色Whiteの明治大学カラーから、この大会に向けて青系グレーのユニフォームにダークブルーの文字の慶応大学カラーに変えた。組合せ抽選会で何と一番くじを引き、長谷川主将が選手宣誓を行うことになり、開会式直後の第一試合となった。植木(元阪神の左腕)を擁する京都の龍谷大学と対戦するが、初回先頭打者中村が四球、一死一塁で打順が廻り、左中間のフェンス際まで飛ばした

が好捕された。中村は既に二塁ベースを回っていたので、抜けていけば得点になっていたと思う。龍谷大学とはいえ開会式後の試合で緊張気味だったので、筆者のタイムリーが出ていけば試合の展開も少しは変わっていたかもしれないが、結果は〇―七のさよならコールド負け。この大会は、田淵山本、富田の三羽ガラスを擁する法政大学が優勝するが、この大学も体が大きいのに驚いた。ファーストベースの上にも立って、背は届かないし、腰の周りは牛並みであった。同じ宿舎の東北学院大学の選手と話していたら、「三重さんは何時から練習しているのですか」と聞かれて、「三時くらいだ」と答えたら、それまで何をしているのかと聞かれたのには驚いた。こういうチームには勝るわけが無いと思った。同大学は三部まであり、入れ替わりで一日中練習をしているらしい。

三年生の時、部長の嶋林先生から、野球場を新設する計画を知らされ、球場の青写真をつくることを任せられた。新球場に神宮球場の土を入れるを思いつき、甲子園球場のようにシューズ袋に詰めて持ち帰り、ピッチャーマウンドの下に埋めたことは、是非伝えておきたい。両翼九・四メートル、センターが二二メートルの立派な野球場はできたが、予想外だったのは、当時はラクビー部の影響力は強く、レフトは移動フェンスで対応せざるを得なかったこと、

グラウンドは、黒土でなく赤土で使ったことである。四年生の時、主将を任された。大学のスポーツ大会で、リレーで陸上部に勝つほど足が速く攻守揃っていたが、安定した投手と捕手経験者がいなかったのが悩みの種だった。その年は、野球場竣工の記念招待試合で白山高校に負けたのがケチのつき始めで、春の東海地区大会は、岐阜経済大学に中盤で七―〇、七回コールド勝ちと思われた試合が、投手が突如四球を連発しバッテリーが感情的になったことで試合の流れが変わり、まさかの七―九の逆転負け。大学での野球は、あつてなく終わった。大学院に進学して、コーチを兼任していたが、福井工大に阻まれ神宮は遠くなった。チームの主力に遠距離通学者もおり、土日は練習ができる雰囲気無く、限られた時間でクラブ活動で、練習嫌いの部員もいたので、チームを纏めるのは結構大変だった。

今、私は

沖繩で観光ボランティアガイド

大西英雄 (大16)

私は沖繩本島北部の瀬底島に移り住んで九年目を迎えています。移住までのお話し(三翠化学第六七号)沖繩だより)の続編です。その後、私は観光ガイドの団体に参加しました。そのガイド団体は二〇〇〇年に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の世界遺産指定を受け、二〇〇五年に今帰仁村が認定するボランティア団体「今帰仁グスクを学ぶ会」として発足したものです。今帰仁城跡を訪れるお客様へのガイド活動のほか、今帰仁城に関連する歴史・文化・民俗に関する研修会、会誌の発行、美化清掃などの活動を行っています。二〇二〇年四月現在の会員数は五六名、その内、約三〇名がガイド活動を行っています。

卒業生の送別会は、江戸橋の八百善が定番で、トロフィーを贈呈するのが習わしであったこと。野球以外では、入学して三翠寮に入ったが、空手部とラクビー部員が羽振りをきかせ、野球部員は少ないため肩身が狭く、時折ある夜中のストームには本当に参った。大学祭で三翠寮生の赤禪での御輿担ぎ、寮生の

の昼食弁当を教育学部に専用自転車運ぶのが低学年生の日課だったこと。トリスイスキーのコップで駆けつけ三杯など(酒は強かったが)。その後、赤痢事件があり、伊藤監督が経営する志登茂寮に移ったが、赤だしの豚汁は格別に美味しかったことが今でも印象に残っている。更に、農学部恒例のクラス対抗ラ

グビー大会、大学から松坂への駅伝大会、江戸橋のぐんた、大門の幡籠、白馬など、枚挙に暇がない。ただ、三重大学六〇周年記念誌に、大学史上初めての全国大会神宮出場の写真が載っていないのは極めて残念である。次の記念誌には是非載せて頂きたい。中学、高校、大学とあこがれの球場すべてでプレー

と呼ばれます。そして彼らは自分の領域を木の柵で囲います。これが発展してきますと石垣で囲うようになります。これを沖繩では「グスク」といいます。グスクには「城」という漢字をあてています。このようなグスクが沖繩本島、北から南まで二〇〇〇〜三〇〇〇近く、造られます。これをグスク時代と言います。群雄割拠の時代です。沖繩の戦国時代でもあります。ただし本土の戦国時代よりも二〇〇年くらい手前の時代で沖繩にはまだ鉄砲もありませんでした。従ってあまり激しい戦いはなかったかと思われますが、それでもやはり強いものが弱いものという形で、段々と収斂していきます。そして北の方は「山



マウスシールドを付けてのガイド姿

化学会社で働いて

伊藤哲雄 (大21)

大学を卒業してから四十年になる。既に退職した身であるが、会社時代を振り返りながら少し書いてみたい。

教授の紹介で、京都に本社のある石油化学系の会社に就職したものの、どんな会社なのかは良く知らずに働き始めた。入社後、会社役員から当社は多くの会社からの要求に合わせて研究開発を行う「お手伝い産業」が仕事だと説明を受けた。確かに、TVでコマースナルを行うような末端製品は製造していないが、少量多品種の製品(数千種類……)を販売する会社だと、後々理解できた。従業員の約30%が研究員であり、入社した日から、多くの会社との共同研究を行う日々であった。時には「プロジェクトX」に出演した人と打ち合わせをしたことも有り、TVで報道されているのと少し異なる話を聞くこともできた。学生時代の農芸化学とは、かなり異なる研究開発に従事してきたものと懐かしく思っている。

のは幸運であった。開発にあたって国立循環器病センターや東京大学等の人工臓器部等との協力得られて、なんとか進めることができたのもラッキーであった。しかしながら、開発を進めるも当分野に対して社内でも理解できる上司がいないこと、また役員を納得させるだけの十分な知識をこちらが持っていないこと等で、学会関係者や医療関係者からの評価は良かったものの、開発は頓挫してしまっ

た。数年後、新たなメンバーが開発を再開させることとなり、できるだけ協力しながら開発を進めたものの商品化まで二十数年の時間がかかってしまった。時間はかかったが、今では血管外科の多くの分野で使われるようになった。本品が、国内で研究開発された医療機器(化学品)の中で最も難しいクラスIVであること、から多くの人の助言を得ながら、国の審査機関である医薬品医療機器総合機構(PMDA)とも慎重に相談を行い申請につなげることができた。松田先生と二人で研究を始めたことから、PMDAには「マツダイト」の名称で承認申請を行った。新規事業分野への挑戦は「自分たちにとって何が分かっているのか、それ自体が分からない」のが実情であり、知っている人間に聞くのが一番だと感じたものだ。社内外にどれだけ人の輪を持っているのか、が勝負なのかも……?

「リーズ」の対象となる。最先端分野の先端材料からの要求はこれほどとほど、初めて知った。

話は変わるが、現在の日本の産業をリードする自動車産業との付き合いでは、皆が知っている自動車メーカーのイメージと同じ感想であった。各社のデザイン部門に材料を納入する業務であったが、トヨタのデザイナー開発担当者は、競合メーカーの車に乗っていると言っていた。特に会社として問題では無く、個人的にその良さを確認のためだとも言っていた。対応が何時も大人であった(商売の担当者は皆ヤンチャで、オーストラリア横断のソラーカーレースの運転手に行ったとか、自分たちのバイクを仲間と組んで自社のレースで優勝したとか、食堂の壁にはF1レースやインディカ・レースの結果が大きく掲げられていたりしてまさに若者の会社だ)。日産は、ゴーン社長の来る前の非常に調子の悪い時期だったため、何時まで経っても決められない会社だと感じたのは仕方ない時期だったと後から思った。

同窓会にどう関わるか

木村幸信 (大25)

同窓会としてできることを考えてみた。「やるべきこと」ではなく、あくまでもやれること、できることである。現在の三翠化学会は、かろうじて年一回の会報発行で、各支部の開催状況、大学でのトピック、クラス会情報など、同窓生に最低限の近況報告を行い、規約を持つ会として

原年一回の総会を開催しているが、特筆すべき活動はしていないと言われている。同窓会として我々は何ができるだろうか? どんな団体を目指すべきだろうか? 会員の皆さんに一度考えていただきたいと思ひ、ここに思いつくまでできることを挙げてみた。

昨今一流企業などではなかなかコネが通用しなくなつたので、昔に比べれば先輩の「ご威光」もかなりかすんできているが、インターンシップ情報程度なら提供できる気はする。そこまですべてなくても、自身の属する企業の業容や事業の現状紹介だけでも学生にとつては意味があるだろう。学部三年生段階で、企業名とその活動がすんなり結びついていく学生はまずいないのではないかと、一般消費者向けに商品を提供している企業以外は学生にとってはほとんど未知の世界である。「〇〇(企業名)に興味があるんですが、どなたか先輩がいらしたら情報ください」と、例えば同窓会名簿から教員を通じて依頼があれば全面協力することはできるに違いない。そんなとき同窓会が一枚噛むのは、できることでは、かつやっつけいかねばならないことだと思ふ。

私自身が企業で新入社員採用のお手伝いをした経験では、出身大学によって、事前の面接訓練を施す大学とそうでない大学出身者では、かなり人事の心象が異なるものであった。例えば、在学生に対して同窓会で面接訓練を実施するというようなサービスはできなくはないと思ふ。小さいことかとも知れないが、このような実利的な面での後輩への協力もあり得る。

先輩に対して

何らかの心の栄養になる可能性はある。

本稿を書くにあたって、機械的に場合分けしたので、当然「先輩に対して」という項も設定したが、具体的には何も思いつかない。先輩の望んでおられることを、できるだけ形にしていこうと、後輩の使命なのだということになるが、先輩は何を望んでおられるだろうか。自分の母校がいつまでも隆盛を続けること、できれば自分の卒業したときよりもっと栄えていることではないか。本件に関しては、現役の指導教員や学生さんのご活躍を期待したい。

- 中川 潔彦 (専2) 副会長 1 期、理事 3 期
 - 岡田 久司 (大3) 副会長 1 期、理事 1 期
 - 原田 俊夫 (専3) 副会長 1 期、理事 1 期
 - 今西 勝 (専1) 理事 3 期
 - 鈴木 幸郎 (専3) 理事 4 期
 - 今井 滋 (大9) 理事 5 期
 - 杉崎 護 (大16) 理事 5 期
 - 辻 静夫 (大19) 理事 4 期
- (期間は 1 期 2 年)

支部役員

- 関東支部長 佐野 恒平 (専1) 長瀬 和夫 (専1)
- 東海支部長 別府 宏 (専1)
- 関西支部長 松村 昌美 (専1)
- 三重県支部長 渡辺 和己 (専1) 佐々木敏夫 (専2)
- 教員支部長 倉田三郎 (専1)
- 県庁支部長 岡田芳次郎 (専1)

また、幹事として、役員会の会場手配、会計、会報の編集、住所録の管理等、三翠化学会の庶務関係を一手に引き受けていただいた当時の若手の先生方、古市 (大13)、小畑 (大15)、田口 (大17)、西川 (大20)、久松 (修8) 等諸氏の努力も忘れることができない。まさに緑の下の方力持ちとなり、あらゆる実務を受け持っていたといたっても過言ではない。

これら役員の方々の中でも専1の皆さんは、三翠化学会同窓生の最初の卒業生であり、その強烈な個性集団として、同窓会を引っ張って来られ、三翠化学会の設立、その立上げ、昭和時代には活動のリーダーシップを遺憾なく発揮されたといえる。専1の先輩なくては、三翠化学会は存在しなかったと思われる。専1というのは、三重農林専門学校 (旧三重高等農林学校) に、昭和21年4月に農産製造科が設置され、その最初の入学生が専1の皆さんである。

「こぼれ話」 専1個性集団エピソード

昭和21年の津は空襲により焦土と化した状態で、津新町など駅周辺に闇市の露店のみがある程度で、市街にポツンポツンとバラックの家屋が立ち始めた頃であった。交通事情、食糧事情は最悪で、東京や大阪の上級学校を目指すことは極めて困難であった。その三重農専に農産製造科が設置され、多数の志願者 (入学倍率 28 倍) が押し寄せた。したがって第1回の入学生は非常に優秀でバラエティーに富んだ面々であった。解体された陸・海軍の関係者及び軍の諸学校出身者が半数近くを占めていた。年齢差も大きく、二代目会長の岡田氏が最年長で、終戦時帝国陸軍の大尉であり、中学校を卒業後入学した者とは大人と子供位のへだたりがあった。当時北大を卒業され三重農専に赴任された松嶋先生の初めての講義で、講義後、最前列にいた岡田氏の、「ところで先生は大変お若く見えますが、お幾つであられるのか」との質問に、松嶋先生は、岡田氏の威厳におされ、教壇に立ったまま返事に窮されたとの逸話が残っている。

強力な個性の持ち主が多く、何事をするにも桁外れであり、世相の反映もあって、無軌道、脱線ぶりも凄まじかった専1の豪勇ぶりは語り草になっていたと聞く。当時、江戸橋、栗真周辺で鳩はもちろん蛇、蛙もいなくなり、挙句の果てには犬や猫も姿を消したといわれている。どうやら農専の学生の蛋白源に始末された模様で、専1の捕獲技術は抜群であったという。また、卒業後クラス会の時、酌に来た芸妓が「これ本当に同じクラスなの？」とよく言われたとのこと。ということでこの大変なクラスの方々三翠化学会の設立から昭和の時代のリーダーシップを取られたのが我々の同窓会なのである。

専1の先輩を中心に三翠化学会を支えていただいた役員の方々以外に、もう一方で三翠化学会を支えていただいた集団に、農芸化学科の先生方がおられる。昭和55年頃から先生方の三翠化学会の総会・懇親会への参加が非常に多くなって来ている。自分が卒業した大学の同窓会ではないが、自分の職場として長年勤めてきた学科の同窓会であり、自分の教え子達の同窓会であるという認識を持っていただいて、毎年の様に懇親会に出ただけようになってきた。教え子にとっては恩師に会いたい、会って話がしたい、会えば懐かしい思い出が戻って来るといことで同窓会への動員力の大きな力になっていた。恩

師は言い方は悪いがある意味で同窓会会員を集める「人寄せパンダ」である。その「人寄せパンダ」になっていただいた先生方の同窓会への参加状況は「表-3 三翠化学会の歴史 総会・懇親会への先生方の参加状況」の通りである。また、先生方は、会報「三翠化学」への15年間で22編の投稿もいただいている。このように先生方にもまた三翠化学会の活動、発展に大きな貢献をいただいた。

表-3 三翠化学会の歴史 総会・懇親会、及び支部会合への先生方の参加状況 (敬称略)

年度	支部	稲川	北岸	梅林	長瀬	奈良	小宮	岩本	奥村	熊沢	柏村	田中	松嶋	赤木	滝	山田
49		○			○							○			○	
50					○								○			
51					○											
52			○	○	○											
52	関東			○	○	○				○			○	○		
53		先生方の参加はなし														
54				○						○				○	○	
55										○	○		○		○	
56				○		○	○						○	○		
57										○				○	○	
57	関東					○	○	○		○				○		
57	東海		○	○		○		○		○	○		○	○	○	○
58				○		○				○				○	○	
59				○		○				○	○			○		
59	関東			○						○	○		○	○		○
60						○	○		○		○		○	○		
61				○		○				○				○		○
62			○	○		○				○	○		○			
63				○						○						
	回数	1	3	11	5	9	3	2	2	9	8	1	8	11	5	3

備考：先生方の参加は、三翠化学会会報の記事より名前を拾い表を作成。
 関東支部：52、57、59年東京で日本農芸化学会が開催され、学会に合わせ関東支部総会・懇親会を開催、54、62年も関東支部総会・懇親会を開催されており、先生方は参加されているが、会報に先生方の芳名が記述されていない東海支部：57年「恩師を囲む会」と銘打ち総会・懇親会を開催

会報「三翠化学」は、設立以来15年間で年2回、29号まで発行された。会報には、毎月シリーズ記事が続けられている。「クラス会だより」「職場紹介」「学生時代の思い出」「今、私は…」「社会人一年生」の5つである。「クラス会だより」48編、「職場紹介」42編、「学生時代の思い出」5編、「今、私は…」71編、「社会人一年生」43編等204編がこの15年間に投稿されている。これら以外の投稿もあり、毎年欠かさず15～16名の人から投稿いただいたことになる。そして何はともあれ、記事を投稿されたのは会員の皆様であり、会員の同窓会への熱い想い、会員相互の親睦、連携、情報の交換等同窓の絆を強めようとする情熱に満ちていた時代であった。

このようにして、三翠化学会の15年の歩みは、役員、先生方、そして会員一丸となった協力により、一步一步積み上げてきた努力の結晶であったといえる。

三翠化学会の歩み 昭和編はここまでです。次号は平成前半編を書く予定です。なお今回の昭和編では、詳細を知る方の多くは亡くなられ、お聞きする術もなく、色々間違い、勘違いもあろうかと思ひます。また、支部については詳細を理解していないことも多くあり、内容に問題があったかもしれません。会報上の数値はできるだけ拾ったつもりですが、数え間違い等もあると思ひます。間違い、問題点等についてはご容赦いただくとともに、ご指摘いただけましたら次号で修正等検討させていただきます。

ただ今回の三翠化学会の歩み 昭和編が今後の同窓会の歩み方の一助になれば……と思ひています。

連絡先：三翠化学会事務局メールアドレス snsllgk@gmail.com

杉崎 (大16)、木村 (大25)



以上、たまたま思い浮かんだことを書き連ねてみました。文中で、大学の組織機能そのものを誤解していたり、「同窓会にできること」はもつとあるよ、大きな事を忘れてるよ、などありましたら、ぜひお聞かせください。元来が親睦を深めることが大事な目的の団体です。例えば「とにかく飲み会をもつとセットしろ〜」というの貴重なご意見だと思ひます。

(五頁より続く)

全国的な企業におられる同窓生にも、積極的に企業とコラボしようとしている三重大学の姿勢を会報で知ってもらえれば(たかが会報……ではあるが)、新たな展開も生まれるのではないだろうか。

私個人の経験であるが、久松先生からお声をかけていただき、「三翠大学カレ」を開発・発売したことがある。今振り返ると、同窓生がこのような形で、三翠大学に貢献できたことはいささか誇らしいものである。私などより知力、経験、実行力のある同窓生はゴマンといらっしゃる。そんな同窓生の人たちの力で三翠大学グッズが新たに産み出されたらさぞや楽しいことであろう。……まずは会報へ寄稿いただき、掲載されて、情報交換が千人余りの同窓生とできることが、一助となればよいのであるが。

今から思えば、本当に懐かしい、楽しかった同窓会の思い出が浮かんでくる時代であった。

4. 三翠化学会の財政とその確立

三翠化学会は、会員の会費によって運営されることになっている。設立当時の会費は年500円でスタートしている。しかし、48年設立時、初年度の会計報告には寄付として約19万円が計上されている。これは、専1の方をはじめとする先輩諸氏有志による出資である。同窓会立ち上げに労を取っていただいた先輩諸氏にはお金まで工面していただき、今更ながら本当に頭が下がる思いである。また、初年度(49年度)の会費の納入率は、卒業生744名、納入者587名、納入率78.9%という高さであった。この数値は当時の同窓生が、いかに同窓会の設立に賛意を示し、その活動、発展に期待していたかを物語っている。

しかし、51年度には70%を切り、徐々に下降傾向になっていった。当時の会計項目の内、収入は会費と雑収入(懇親会費の残金等)、支出は会報印刷費、郵送連絡費、会議費、事務費、その他で、支出の大部分は会報の印刷、郵送費であった。会報の印刷費、郵送連絡費の値上げ等により、会報の頁数、郵送連絡費の削減に注力せざるを得ない状況になり、会報の目的とする会員相互の連携、情報交換の充実を計る意味で、52年度より会費を1,000円に値上げしている。

さらに、農芸化学科設置30周年を記念し、三翠化学会記念事業基金制度が、53年の総会で承認され、基金募金委員会を設置し、実行委員を選び、募金活動に入った。その主なる目的は、①三翠化学会の組織強化 ②在学生への補助

③その他三翠化学会に関する諸事業への補助を三本柱とした基金制度を発足させることとしている。活動期間約2年を経て、卒業生851名、基金応募者596名、基金応募率70.0%、募金額目標300万円を突破し、312.3万円を達成し、活動を終了した。このように財政基盤を確立し、以降、昭和の時代は、年会費、懇親会会費の残金を収入とし、さらに本基金を運用しながら活動を続けた。

基金の運用については、まず在校生への補助にはじまり、農芸化学科応援旗の贈呈、農芸化学科機関紙「こうより」への資金援助、卒業生への記念品の贈呈が実現した。応援旗の贈呈効果は即現れたのが、54年11月の農学部駅伝大会(50数チーム参加)で、農化3年生が優勝、4年生が5位、2年生が9位と農芸化学科始まって以来の成績を挙げた。卒業記念品の贈呈は、卒業式に三翠化学会の会費(2年間分)納入率100%を達成し、農学部全体の同窓会三翠会へも全員入会等大きな効果を上げていと報じている。さらに各支部や新入生歓迎会への助成にも支出されるようになった。

5. 支部の設立とその活動

三翠化学会では、会員相互の親睦と情報の交換が設立の目標になっていた。よって、地域別、職域、職場での繋がりを持つ意味で、活動初期から支部の設立は重要な事業となっていた。

早速、49年4月2日には東京支部が設立され、虎の門共済会館に64名を集め設立総会が開催され、支部長に佐野恒平氏(専1)が就任された。52年4月には会員を関東一円とし、第2回の総会を開催し、関東支部に改名、78名を集めた。54年4月には第3回の総会を開催し、支部長の交代があり、長瀬和夫氏(専1)が選出された。以降、関東支部は、東京で開催される日本農芸化学会に合わせて、2~3年に一度支部の総会・懇親会を開催し、昭和の時代関東支部の大きな特徴として、学会に出席される先生方大勢に、総会・懇親会に参加いただき、同窓会支部の活動を重ねてきた。

東海支部は、会員を愛知、岐阜、三重とし、53年4月2日、名古屋東別院青少年会館に130名の会員を集め、設立総会・懇親会を開催した。支部長には、別府宏氏(専1)が就任された。東海支部は、「遊びに徹する支部」として、総会・懇親会は2~3年に一度開催し、その間は、ゴルフコンペ、家族同伴のボウリング大会、麻雀大会等を毎年開催し、年によっては2回開催し、会員の親睦を計ることに重点を置いて来た。また、59年からは、61年、63年と総会・懇親会は、三翠化学会本部と合同で開催して来た。これは、本部、支部とも参加人員を確保するための対応であったと思われる。しかしこの間も東海支部はゴルフコンペ、ボウリング大会等は継続して行ってきた。

関西支部は、その会員を関西一円とし、59年2月4日、大阪上六近鉄の「レストラン都」で71名を集め、設立総会・懇親会を開催した。2回目の開催は、会報に予告記事はあるが、残念ながら昭和の終わりまで関西支部の記事は見当たらない。

三重県支部については、次の章に改めて記述する。

6. 三重県支部の設立と活動

三重県支部の設立は、前章の他支部とは少し違った経緯をたどって来た。昭和40年頃から、農芸化学科出身の高校教員で教科書の検討会を中心に懇親会が行われていた。50年5月26日、そのグループを核に三翠化学会教員支部として発足し、県内の三重大、松阪女子短大、及び中学高校の教員を会員として、

30名程度でスタートした。支部長は倉田三郎氏(専1)で、研修会、懇親会をベースに、年2回ほど開催し、真面目な活動を続けていたが、会報への投稿記事は初期の2回しかなかった。

農科、林科、土木は県庁が同窓会の一大拠点となっており、その連合会として、三翠会三重県支部協議会が活発に活動していた。農化もお付き合いし、支部設立の要望の声が大きくなり、三翠化学会県庁支部は、50年5月14日、会員20名で発足した。この支部設立の記事の文章を借りると、「今日は三翠化学会一杯やでのオ……」と言えば妻君から「しっかり飲んできてネ」と激励して送り出してもらえるような、我が家の最高の公認団体、それが三翠化学会県庁支部の理想像である。会議は「必要の都度、支部長が招集する。」とあり、定期総会もない。気楽と気軽に絵にかいたような団体ができ上がった。しかしながら、この記事が最初で最後となっており、県庁支部の活動の実態は全く判らない。

53年4月2日、東海支部の設立に際し、三重県内の会員は東海支部の一員として同支部に参加することになった。上記教員、県庁支部は三重県内でそのまま重複した形で存続した。しかし、三重県内の会員は200名を突破し、東海支部より独立し、二つの支部を吸収合併する形で三重県支部設立の機運が強くなってきた。もう少しうがった見方をすれば、本部自身の動員力のアイデアが壁にぶち当たってきたこと。東海支部の「遊びに徹した活動」に対抗する柱を望んでいたことがあったと思われる。そして東海支部とは異なる活動の方向性を新規三重県支部に求めたと考えられる。

58年5月15日、三重県支部の設立総会は、三翠化学会設立10周年の総会と兼ねて開催され、支部長には渡辺和己氏(専1)が選出された。以降、三重県支部の総会は全て三翠化学会本部と併設で開催され、三重県支部としての活動は、「表-2 三翠化学会の歴史 三重県支部の活動(家族・子供同伴の野外活動)」に示す通り、野外の大漁大会、森林浴大会、キャンプファイヤー大会、林間キャンプ大会、農場焼肉大会等、家族・子供同伴の野外活動に徹し、他支部と大きく違った方向を見せている。ただ、企画、準備等幹事さんは大変で、さらに資金面で先輩諸氏には毎回ながしかの負担をいただいていたことを書き添えておく。

表-2 三翠化学会の歴史 三重県支部の活動(家族・子供同伴の野外活動)

昭和 年月日	活動内容
58.08.07	川魚大漁大会 伊勢市宮川に仕切り網を設置、家族・子供同伴 70名参加 スズキ 40匹、ニゴイ 40匹、ウグイ、フナ 30匹をたもや手掴みで捕らえる。河原で捕らえた魚を串焼き、持参の鯉のたたきを肴にビールで乾杯
59.08.04~05	森林浴大会 三重大演習林一泊、家族・子供同伴、58名参加、ヒグラシが鳴き、カラスアゲハが舞い、ウバユリ、クサアジサイ咲く森林を散策。夕食は山荘「大吉」でアマゴ料理に舌鼓、翌日はアマゴ釣り、アマゴ掴みに興じる。
60.08.03~04	キャンプファイヤー大会 大安町宇賀溪、家族・子供同伴 在学生(4年生) 60名参加、夕べはファイヤーを囲み、バーベキュー大宴会。朝食は自炊の鶏めし。瀧水で冷やした素麺を食べながら子供たちのスイカ割に興じる。
61.08.09~10	林間キャンプ大会 宮川村大杉谷 家族同伴 41名参加、夕食は特選和牛肉をメインにバーベキュー大会、他にカレー、素麺で一同満腹。翌日は宮川ダムを船で観光。第三発電所下の溪河原にて魚釣り、魚を焼いて昼食
63.04.24	本部、三重、東海支部共催、三重大付属農場、家族・子供同伴 80名参加 ジンギスカン鍋を囲んだ焼肉パーティー。農場特性のタレに浸した羊肉の焼肉、和牛雌のリップロース、内ももの焼肉に舌鼓

以上、2章に亘って、各支部について記述してきたが、まとめてみると関東、東海、三重県の三支部とも特色ある活動をしてきたといえる。関東支部は学会に合わせ、先生方を多数お呼びすることで、東海支部は、遊びに徹するとして、ゴルフ、ボウリング、麻雀大会の開催で、三重県支部は家族・子供同伴の野外活動で、会員の動員に注力し、会員の親睦を計り、三翠化学会の発展に大きく寄与してきたといえる。関西支部は設立されて間もなく、まだ活動に特色を求める段階に入っていなかった。

7. 三翠化学会の活動に尽力いただいた人たち

設立から昭和末まで、同窓会「三翠化学会」の役員(会長、副会長、理事3期以上)として、特にその活動、発展のために尽力いただいた方々を列記すると次の通りである。

三翠化学会本部役員(敬称略)

- 嶋林 幸英(専1) 会長2期、理事3期
- 岡田芳次郎(専1) 会長4期、理事1期
- 渡辺 和己(専1) 会長2期、理事2期
- 若林 長生(専1) 副会長1期、理事2期
- 辻村 恒(大3) 副会長1期、理事2期
- 福田 映(大1) 副会長2期、理事3期
- 高橋 孝雄(大6) 副会長2期、理事2期
- 嶋田 協(専3) 副会長2期、理事3期
- 渋谷 明(大4) 副会長1期、理事3期
- 藪本 義男(大4) 副会長2期、理事2期

会報でたどる三翠化学会 50 年のあゆみ (第 1 報)

1. はじめに

コロナ禍に日常を奪われて早や 1 年半、三翠化学会の活動は役員会すら開けず、昨年、今年と総会、懇親会も開催できず、また一昨年は台風 19 号の来襲で総会を中止せざるを得ず、三年に亘って会の活動が全く停滞している。昭和 48 年 11 月に三翠化学会が設立されてから残すところ後 2 年で 50 周年になるというのに……。

初代会長 嶋林先生が亡くなられて、この年末で丸 2 年になる。生前、同窓生の皆さんと共に 50 周年を祝い、その歴史を噛みしめたいと何度も話されていた。先生は、三翠化学会の設立、及び発展の最大の功労者であっただけに、そのご恩に報いるためにも何らかの 50 周年のイベントを立ち上げなければと思っている次第である。

その前にまず「三翠化学会 50 年の歩み」について、一度総括したいと思い、「設立から昭和末までの 15 年間」「生物資源学部発足から農芸化学コース時代の約 15 年間」「農芸化学コースが 2 学科に分割されてからの約 15 年間とその後」の 3 期間に分け、3 部作で 50 年の歩みを、会報「三翠化学」の記事をもとにたどってみることにした。今回はその第一報、「設立から昭和末までの約 15 年間」の報告である。

2. 三翠化学会の設立

三翠化学会の設立は、昭和 48 年 11 月 24 日である。設立総会は予想外の盛会で、当時の三重県知事田川亮三氏（農科 15 回卒）をはじめ、当日参集された来賓、会員諸氏はいかに及ばず、その後に寄せられた会員の意見や感想、さらに三重大学内外の評判、反響も期待と好意に満ちたものであったと会報は伝えている。

そもそも設立の経緯については、嶋林先生は、追悼文集「長瀬先生をしのぶ」の中で「長瀬先生と三翠化学会」と題して「私の三重大学赴任後まもなく、先生から本学科卒業生を中心とする同窓会の設立を考えてみたらどうかという助言をいただきながら実行に至らず……。先生のご退官後約 10 年たった昭和 48 年 11 月、三翠化学会が設立、発足の運びとなり、24 日に設立総会を迎えたのであります」と書かれている。総会設立に至った経過は、総会案内に添えられてあるとされているが、残念ながら設立総会の案内文が手元に残っていない為詳細は判らない。ただ、なぜ 48 年になったのかについては、卒業生が 800 名近くになったこと、農科、林科、土木等の他学科の同窓会組織との兼ね合い、また、化学の同窓生諸氏からも同窓会設立の要望の声が先生の耳に届いていたものと考えられる。同窓会設立の趣旨は会員相互の親睦と情報の交換を十分に果たすことではあるが、化学科の場合は他学科のように県庁（同窓の集団）という核がなく、縦の連帯感が弱いため、先輩、後輩の繋がりを補強すると同時に、身近な地域・職域、職場での繋がりを持つような同窓会の設立を求める声があったものと思える。

というようなことで、設立された三翠化学会の事業は、定期総会、会報、名簿の発行、地域ごとの支部活動が考えられ、さらに本会存続のために財政的基盤の確立が急務としている。

3. 三翠化学会の目的と事業の歩み

三翠化学会の会則によると、目的は会員相互の親睦向上と母校の隆昌を計ること、事業は会員相互の連携と情報の交換に関する事業、及びその他必要な事業としている。

三翠化学会は、会則にのっとり、48 年の設立総会以降、毎年会員相互の親睦向上を計るため、開催場所を変え、年により講演会を行い、毎年趣向を変え総会、懇親会と計画し活動を行って来た。(表-1 三翠化学会の歴史 総会・懇親会のあゆみ参照) しかしながら、49 年、50 年こそ 60～70 名の参加者があったが、以降 54 年に向け 40～50 名に動員力が低減して行き、早くも壁に突き当たった。役員会で何とかしなければ、何か目玉はないかと議論・検討した結果、クラス会との共催をお願いし、動員力を計ることとした。

55 年の初の一泊合同同窓会の共催、56 年の大学祭に合わせた開催、58 年の三重県支部設立総会との併催など企画し実行した。

140 名としているがもう少し多かったのではないと思われる。クラス会の膳が人数分きちんと用意されているのか心配で仕方がなかった。3 時半すぎたころ、「今まだ埼玉にいる。出席は連絡してないが、クラス会には間に合うように行くから、飯と酒は用意してくれ」との電話が入り、「大丈夫、入間基地から久居にヘリで行くから、そこからタクシーを飛ばせば間に合う」との強者もいた。大学の同窓会に出席するのに自衛隊のヘリコプターを利用するなどあまり聞いたことがないが、古き良き時代の出来事か。

クラス会は、専 1、専 3、大 4、大 16、大 17、大 25、混合の 7 クラスの酒宴が繰り広げられたが、時間と共に、酔いに任せ、各クラス間に入り乱れ、さ迷い歩く酔っ払いの叫び声が深夜まで榊原館に響き渡った。さらに翌日目を覚ますと、昨日呼んだコンパニオンがまだ残っており、「延長料金を貰ってない」とか……。会則の目的である「会員相互の親睦の向上」は大いに計れたが大変な同窓会であった。

56 年は、「祭り」と酒がテーマで、大学祭の農化展の日程に合わせ、総会は三翠会館で開催され、三重県下地酒 70 銘柄の飾り樽を集め（農化展）懇親会では酒造会社関係の先輩方から寄贈していただいた酒で利き酒大会が開催された。成績を判断すると「飲むこと」と「飲み当てる（利く）こと」との違いをまざまざと見せつけられた。醸造試験所の技師、お酒の販売店の主人、酒造会社の子らはさすがであったが、酒豪と称される専 1 の皆さんや、酒好きといわれる先生方は、利くことではあまり良い成績は収められなかったようである。また、同時に開催された大学祭の農化展でも大学祭の見物客相手に利き酒コーナーが設けられ、大学祭一番の人気を集め、翌日の伊勢新聞を始め各紙に掲載された。

58 年は、本会設立 10 周年と三重県支部の設立が目玉で開催された。午前中大学で、三翠化学会の総会、及び同三重県支部の設立総会を開催し、10 周年の櫛（けやき）の記念植樹式（化学科二年生の実験室前）を行った。午後は場所を津駅に近い三重県社会福祉会館に移し、三翠化学創立 10 周年と三重県支部設立を記念した祝賀会が開催された。森邦夫農学部長、東畑幸佑三翠連絡協議会代表を迎え、岡田会長の挨拶に続いて、森学部長の祝辞、三重県知事の祝辞（東畑代表代読）、東畑代表の祝辞をいただき、祝宴に入った。

この年は 10 周年、三重支部の設立、櫛の植樹式等の目玉で 86 名の参加者を集めた。

以降、三翠化学会本部の総会、懇親会は、三重県支部、東海支部との共催で行われ、会場も大学、県内、名古屋と毎年替えて、80～100 名の参加者を集めて昭和の終わりまで動員力を維持してきた。また、次章に記すように 58 年からは春に本部と支部の総会、懇親会、夏休みに三重県支部が家族同伴の野外活動を計画し、三翠化学会としては設立以来一番充実した活動が展開された。

表-1 三翠化学会の歴史 総会・懇親会のあゆみ

昭和年度	月日	会場	参加人数	備考
48	11.24	三翠会館		嶋林幸英氏 会長就任
49	5.26	農場（高野尾）	60 名	会員名簿発行 年会費 500 円
50	5.25	洞津会館	70 名	講演 深海京大教授「昆虫の性のからくり」
51	5.25	神宮会館	50 余名	
52	5.22	三重大学農学部	40 数名	岡田芳次郎氏 会長就任 年会費 1,000 円に値上げ
53	5.21	名古屋（全通会館）	50 名	三翠化学会設立 5 周年、大学設置 30 周年基金の委員会設立、講演 鈴木元中日新聞論説委員「現在のマスコミの当面する課題」
54	5.27	三重大学農学部	50 名	講演 山下元三重大教授「蛍の光」
55	5.17	榊原温泉榊原館	140 名	7 学年のクラス会と共催 一泊、基金 募金活動完了 目標額達成
56	5.31	三翠会館	70 名	利き酒大会（三重県下 70 数社の酒造業者より自慢の地酒が提供される）
57	5.23	洞津会館	50 名	
58	5.15	三重大学農学部 三重県社会福祉会館	86 名	設立 10 周年、三重県支部設立、10 周年を記念して けやきを植樹
59	4.15	名古屋（頤和園）	90 名	東海支部と共催 「恩師を囲む会」
60	5.26	四日市（農協会館）	91 名	渡辺和己氏 会長就任 三重県支部と共催
61	4.13	名古屋（サンルートホテル）	100 名以上	東海支部と共催、講演 浅井元名古屋市助役 「名古屋と云うとこ」
62	5.10	三重大学農学部	70 名	10 月生物資源学部発足、講演 恩師 松嶋先生 「今昔物語」
63	4.24	付属農場	80 名	三重・東海支部と共催 家族同伴 焼肉パーティー

「こぼれ話」 同窓会エピソード

55 年には「温泉につかり浴衣がけの同窓会」と銘打って、榊原温泉榊原館で、初めて一泊の同窓会を企画した。なにぶん初めてのことで特別に担当幹事を決め、渡辺（専 1）、渋谷（大 4）、杉崎（大 16）、中世古（大 25）、会計担当小畑（大 15）が準備に当たることになった。

総会だけに出席して帰る人、総会と懇親会だけの人、総会、懇親会、クラス会一泊のフルコースの人、クラス会一泊だけの人と 4 通りあり、その上、10 数名の人が当日欠席、予約なしの出席との電話が旅館にかかって来るなど参加人数が最後まで把握できず、幹事は大変苦労した。参加者